

平成30年度 青少年問題調査研究会 第3回議事録

日 時：平成31年1月23日（水）

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付青少年企画担当

司会 皆さん、こんにちは。ただいまから第3回の「青少年問題調査研究会」を開催したいと思います。

皆さん、本日はお忙しい中、ありがとうございます。

内閣府では、平成27年度にひきこりに関する実態調査というのを実施しております。そこで調査をしたところ、ひきこりの長期化の傾向が認められたところでございます。そんなこともありまして、今回は、コミュニティーソーシャルワーカーとして日々現場で制度の狭間の方々を発見し、その課題を解決していくという取組などを実践しておられる豊中市社会福祉協議会事務局 福祉推進室長の勝部麗子先生に、中高年のひきこりの方など困難を抱えている方々の現状などについて具体的にお話をいただき、また、コミュニティーソーシャルワーカーの仕事などについても併せて御紹介いただきたいと思いますところでございます。

勝部先生は豊中市社会福祉協議会に入職後、ボランティアセンター、地域福祉ネットワーク活動、当事者組織など、地域の組織化、地域福祉活動計画に携わっておられます。平成16年度からスタートした大阪府地域福祉支援計画のコミュニティーソーシャルワーカー設立事業の1期生でございまして、平成24年度より厚生労働省の社会保障審議会（生活困窮者の生活支援の在り方に関する特別部会）の委員などもされております。

また、取組がドラマのモデルとなり、ドラマの監修をされたり、テレビ番組にも出演されておられますので、そういったところで御存じの方も多いのではないかと考えております。

今日は限られた時間ではございますが、先生にお話をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

「豊中市社会福祉協議会のCSWと生活困窮者自立支援とりくみ
地域共生社会へのあらたなステージへ中高年の引きこもり問題」
社会福祉法人 豊中市社会福祉協議会 勝部 麗子氏

勝部氏 皆さん、こんにちは。

御紹介いただきました、大阪から参りました豊中市の社会福祉協議会の勝部と申します。
よろしく願いいたします。

ふだんは厚生労働省の方のいろいろな関わりで会議に出させていただくことは多かった
のですけれども、内閣府ということで、特にこのひきこもりの問題というのに非常に昨今、
注目も集まってきておりますし、生活困窮者自立支援事業というのがスタートしたときに、
生活困窮者はどんな人なのかなというのが、困窮のおそれがあるというのは一体どうい
う人たちをターゲットとして見ているのだろうかという話が出てまいりました。

ちょうど我々はその前にパーソナルサポート事業というのがありまして、モデル事業の
期間にいろいろな方々の支援をする中で、このひきこもりという問題がかなり長期化をし
ていて、親が80になり、息子が50になるというあたりで親もギブアップして、やっと社会
の中に出て登場してくるという存在の多さに驚き始めていたというのが当時の思いであり
ました。

結果としては、3年前から生活困窮者自立支援事業が全国でスタートしたら、あちらも
こちらもこういう相談がたくさん出始めて、ひきこもりというのは39歳までのいわゆる若
年の若者支援という位置づけでいたのが、実はそうではないのではないか。その39歳まで
ということでは全くなくて、その後も継続している人たちがかなりいるのではないかと
いうことが明らかになってきているということで、この度、また、もう少し上の年代の人た
ちの調査も本格的にやっっていこうというのが今、国の流れのようにお聞きしています。

それに先駆けて、関東の埼玉か千葉かで事前に調査されたところでは、55%以上がもう
40歳以上のひきこもりの人たちなのだというようなことも調査で出ているというようなこ
ともお聞きしますと、これは非常に深刻であります。生活困窮者自立支援法の改正に伴い
まして、社会的孤立ということが一つのテーマになり始めています。経済的困窮だけでは
なくて社会的孤立に向かってどう対応していくのか。そう考えたときに、このひきこも
りという課題については、社会参加を保障するというところから長らくの間、排除されてき
ているような人たちの課題になりますので、ここをしっかりと向き合っていくというのが
今の時代、平成が残した大きな課題ではないかと私自身は認識をしています。

これはOECDの出した、2005年ですので、少し昔のデータですが、社会的孤立の状況につ
いてのデータが出ております。家族以外の人と話す相手がいないという人の数が、日本が
先進国の中で断トツ1位、15.3%ということが出ていますが、この中のイギリスが5%ぐ
らいで、孤独担当大臣が出たというのは皆さんもよく御存じのお話だと思っておりますけれども、
孤独によって相当、社会的損失があるということをお話しされています。

昨日、私は学術会議の中でイギリスの大学の先生からお話を聞きましたが、イギリスにおいては孤立によって、それこそ孤独死が起きたりとか鬱が起きたりとか自殺が起きたりとかということで、社会的損失をずっと計算すると年間5兆円ぐらい損失があるというように積算されているそうです。日本はGDPが大体2倍ぐらいで、孤立率が3倍というように単純計算すると30兆円ぐらい、日本は孤独によって、孤立によって、いろいろな問題が起きているのではないかというような推測はできるかなというようなことを思ったところがあります。

特に孤独を感じている15歳の年齢は断トツ、日本の子供たちが孤独を感じているということが出ています。これは子供たちが学齢期のいじめの問題であったりとか相談ができないということからひきこもりがスタートしていく、不登校がスタートしていくという状況も加味しますし、社会的孤立ということが非常にいろいろな問題の根底にあるということ強く認識するようになったのが生活困窮者自立支援の中の問題でした。ごみ屋敷や孤独死、孤立死、自殺、不登校、ひきこもり、虐待、薬物依存、それこそテーマ別に見えているいろいろな課題というのが、実はその根底に社会的孤立というのが非常に大きくあります。

今日のテーマでありますひきこもりの問題は同級生の人たちが御近所にいる。だから、近所のつき合いをやめる。親戚とつき合いをしていると、親戚からお宅の息子はどうしているのかと問い詰められる。だから、もう法事に行くのもやめるということで、ますます社会から家族自体が孤立していく。そして、誰にも相談ができないという中で1年たち、3年たち、5年たち、10年たち、改善の道筋が見つからないままに時間がたっていっているというのが長期化の原因ではないかと思うようになっております。

私たちがこういう問題を考えるようになりまして、昨日、我々の取組がテレビ番組で紹介されています。御覧いただきたいと思います。

(ビデオ上映)

勝部氏 ということで、彼は最初に出会ったころはアルコール依存でぐでぐでんになって、電動車椅子でお酒を飲んでひっくり返っているという様子でずっとあったのですが、それ以前はお母さんが介護状態であった、お父さんも介護状態であったというのがあって、お父さんが亡くなってお母さんだけになっていたのですけれども、その当時はケアマネジャーが入っていました。彼の家は親の年金を当てにして経済的虐待をしている息子として、当時、彼は登場していました。

親子をどうやって分離するかとか、包括支援センターは、お母さんを何とかどこかの施設に預けて息子さんを切り離すということを一生涯懸命試行していたということがその以前にはありました。その頃は、我々はつながっていなかった。まだこの法律自体ができていなかった、生活困窮者支援というのもできていませんので、当時の例えば高齢者の部門でいくと、この50代の息子というのは虐待の主体者という扱いで見られていて、では、親はどうしているかということ、親の思いは、この息子と離れて暮らしたいかということ決してそ

れが願いでもなく、自分1人がどこかの特別養護老人ホームに入って幸せかという決してそこではなくて、息子が何とか自立して社会参加できないか、仕事に就けないか、あるいは経済的に何とかならないかというように思っているのがほとんどの親ですが、今の法律的な枠組みでいくと、この80代の親、介護状態の親と50代の無職の息子あるいは娘という形になってくると、たちまち現行の制度の中ではこういう人たちというのは息子、娘が経済的虐待、場合によっては、お金をしてくれないときに暴力を振るったりすると身体的虐待、ネグレクトというような形で虐待の当事者として現れていたというのがここ5、6年前までの日本の中の長期化したひきこもりの人たちの姿であったというのが実感であります。

よく私たちもその頃、親の相談から息子さんたちの話を聞いたときに、お母さんの介護はいろいろとできていったとしても、息子というのなかなか支援ができない、娘が支援できないということで、引き離して何とかなるかということ、親はまた息子が心配で戻ってくる。なかなか改善していかないという中で、共依存だとかいろいろな言い方をしていますが、あるとき、90になるお母さん、息子さんはもう60に近づいていた方でしたが、私は息子が死ぬまで生き続けます。自分の年金をもらい続けるしか彼の生きる手だてはないので、一日でも長く生きて、息子よりも長く生きることを目標にしていますという話を聞いたり、息子さんの働きたいという願いを何とかかなえるということで、私が本人と話をしたら、うーんと首を振って、寝たきり状態になりながらも、一生懸命、息子のことを考えている姿を見たときに、これはただただ息子たちを悪者扱いして社会的にこの人たちが悪くて、親はいいものだというような理解でよいのかということをしごく思うようになったわけです。

そこで、この制度、生活困窮者自立支援がモデル事業で始まったときにそうですよねと、ケアマネジャーさんは親の支援ができるかもしれないし、包括がそちらに関わったとしても、息子や娘というのは今まで悪者にされているだけだけれども、本当はこの人たちの社会参加というのをもう少ししっかりと方法論があれば、就労支援ができれば、あるいは社会参加できていくような方法論があれば、ひょっとすると親子ともども元気になっていくのではないかとことをしごく思うようになって、これが今まで縦割りでサポートしていたことの問題で、横串で生活困窮というところでサポートしていくと、両方がしっかりともう一回、社会の中で自分たちの役割を果たしていくことができるのではないかとことを考え始めました。

そんな中で、現在、地域共生社会という新たなステージへということで、全てのいろいろな省庁が地域共生社会ということで動き始めていますが、地域共生社会とぱっと言われると何だかよくわからないのですけれども、私たちの町では、今、この4つのことをテーマに考え始めました。いろいろな人たちを支えている中で、本当に一人も取りこぼさないということではできているのかなというような中で、その最たる人たちの狭間の中で誰からもSOSを見出されなかった人たちに長年のひきこもりの人たちがいるということです。SOS

を出せない、出さない、そして、支援の策すらないという人たちがたくさんいるわけです。

多くの人たちがこういう人たちは排除されているというところをどうやって地域の中に、その人たちの居場所や役割をつくっていくかということの本気で考えていたかということや、きっとこの人たちは支えられている人に一瞬はなるのだけれども、支え手に変わっていくよねということを目指し始めました。全ての人に居場所と役割を、こういうことを始める中でいろいろな問題が見え始めたということです。

先ほど御紹介いただきましたが、我々、大阪府ではコミュニティーソーシャルワーカー、今、生活困窮者自立支援法も断らない福祉ということで、総合相談をやっていくということを目指して動き始めました。全国展開が始まりましたが、その前段、平成16年から私たちの町では、この制度の狭間の問題や、いわゆる地域の中でSOSを出せない人たちを掘り起こして支えていく地域づくりをするということを展開しております。

その中から、先ほど見ていただいたようなごみ屋敷の問題や子供の貧困・ひきこもり・8050・アルコール依存・刑余者の問題などなど、なかなか縦割りの今までの制度・施策では対応できないような問題が地域の中でたくさんあって、これというのは一体誰が対応するのですかというのが決まらないままにずっとそういう声が社会的に見えないことになっていた。これを私たちの町でこういうような全て断らない福祉で受け止め始めると、何と何といろいろな問題があるのではないかということが見え始めて、そういう方々をサポートしていく仕組みづくりを始めていったというのが私たちの町のスタート、本格的な町の支援のスタートでもあります。

今、同じようにコミュニティーソーシャルワーカーとか生活支援コーディネーターとか生活困窮者自立支援とかという形でいろいろ断らないとか、地域づくりを志向するワーカーが生まれていますが、この地域づくりというのが先ほどお話ししたような地域共生社会に向かっていくというのがこれからの考え方なのだろうと思っています。

では、なぜこのひきこもりという問題が出てくるのかということ豊中の町で考えていきますと、基本的には本人・家族が小さくなっていることです。3世代同居というのはもうほとんどなくなっていますし、3世代同居でひきこもりの息子たちがいるなどという、また家族内のいろいろなもめごとがあつたりするわけですがけれども、本人・家族が小さくなっている。そして、御近所が、もう近所のつながりがとても弱まっている。

そこで、我々の町では、小学校区ごとに見守りの組織をつくっています。この地区社協の中にボランティア部会というのをつくって、この人たちが地域の中の見守り活動を行うような内容で取組を進めてきています。これは今回の大阪北部地震でも大変効果がございました。基本的には阪神・淡路大震災がきっかけで地域の見守り活動ができる組織、ボランティアな組織をつくってきたということになります。

地域の人たちはいろいろな問題を発見すると、いろいろな課題を見つけますが、その見つけた問題が平成16年当時、実は行政の中では縦割りで、例えばごみ屋敷の問題は地域の人たちが気になるからということで発見して市役所に相談に行こうと思うと、担当部署が

決まらない。

その方は何歳ですか。62歳だと言ったら首をかしげられて、62歳ですか、65ではないですと聞かれる。高齢者ではないですね。では、障害者ですか。障害者があるかどうかはわかりません。そうすると、障害者かどうかわからない。生活保護ですか。生活保護を受けているかどうかは知りませんという話になると、しょうがないですね、ごみの問題だからごみのところの担当にお願いしないと仕方がないですね、環境部に電話してください。環境部に電話をすると、環境部の方は、御本人はそれをごみとおっしゃっていますかと聞かれる。本人は宝とっておりますとなると、本人がごみと言わなかったら勝手に捨てるわけにいきませんという話になって、結局、たらい回しになって制度の狭間です。誰も対応してくれない。

ひきこもりの問題も同じです。当時、例えば家の中で、どうも御両親が亡くなった後、一人で暮らしているけれども、ごみ出しも十分できなくて、鬱蒼として家の管理ができない息子さんがいる。ああいう人がいるけれども、どうなのだろうかと近所の方が気になって市役所に相談に行くと、その方は障害者ですか。いや、障害があるかどうかはわからない。年齢は若いです。まだ40代、50代。そうしたら、高齢者ではないですね。病気があれば保健所ですが、病気がないのであれば保健所かどうかもわかりません。誰も対応してくれない。本人もどこに相談に行ってもいいかわからないというのが現状だったわけです。

こういう問題が実にたくさんあって、今までは制度に当てはまる問題だけを市のサービスは受け止めていたけれども、当てはまらないものは断っていた。断っていると、結局、問題解決にはつながっていかないので、そして、もっと言いますと、地域の人たちの見守り力というのが軽減していきます。一生懸命見守っても解決してくれる人がいないのだったら余計なことはやめよう。

見守れ、見守れと言われても、実際に見守って解決する人がいないのだったら余計なことはいらないほうがましよねということで見て見ぬふりが始まっていくということで、その見て見ぬふりを本格的にサポートするということが平成16年、コミュニティーソーシャルワーカー、平成18年、地域包括支援センター、こういうものができてきて、今、全て受け止めますよという体制になってさまざまな問題が明らかになってきたということであります。

行政レベルでは、今はもちろんサービスもいろいろありますが、事業所による見守りとか、いわゆる電気、ガス、水道のメーターを見たり、そして、見てくれる人たちや新聞配達員の方たちです。こんな人たちも見守りの協力者になって、今、地域でさまざまな見守りをし始めたということであります。

しかし、自治会の組織率はどんどん下がっていました。マンションは管理組合をつくりませんが、自治会はつくりませんという中で、心配な人たちが町の中のどこにいるのかがなかなかわからない。SOSを出さない、出せない、こういう人たちがたくさんいるというところで、私たちの町に事件が起きました。

(ビデオ上映)

勝部氏 先ほどローラー作戦のところで見ていただいた、赤いサンバイザーをしていた彼女の担当エリアで先ほどの事件が起きたわけです。見守りというのは地域の中で、彼女はひとり暮らしの人は全部見守っていました。ふたり暮らしの人も全部高齢者世帯は見守っていましたが、事件が起きました。3年前です。

もう早朝、この事件が起きたら新聞社が彼女の家をどこかから調べてやってきて、テレビ局がいっぱい押し寄せてきて、自分の地区の民生委員さんですね。あなたはなぜ80代と50代のこういう事件が起きたのを見守ることができなかったのかと問い詰められた。もうこんなことを言われたら民生委員のなり手がないですと泣きながら彼女は電話してきたわけです。

実際、不幸があったわけです。80代と50代の人のお家というのは袋小路の一番奥だった。だから、わざわざ訪ねない限りは基本的には出会うことがなかったということと、50の娘が80の親を見ているなんて当たり前の家ではないかと言われました。そうなのです。そこは娘さんなので、介護者として娘が親を見ているという言い方であれば、これは一般的なお家に見えます。ただ、親の年金でその娘は暮らしているというようになると、介護ということで介護離職という名前で親の年金で暮らしているという人たちというのは相当数いるということで、こんなものまでは問題なのかということで彼女に言われたのです。

よくよく考えると、その娘さんというのは知的に課題があったやもしれないことがだんだんわかってきました。ずっとお仕事をしていない人だったということがわかってきたときに、これは普通にお仕事をしていて介護離職をして、そして、親を見ているという状態というよりは、むしろずっと家でひきこもっていて、親の体調が悪くなって介護をしていたという状態だと考えたときに、彼女は本当に親が亡くなったときに、年金詐称問題で大問題になったのですけれども、年金を詐称しようとしたのか、届け出の方法がわからなかったのか、障害があってお母さんたちのそういうその後のいろいろな手続きのことがわからないままに何となく日にちが過ぎていっただけなのではないかということも考え始めたわけです。

そう考えると、ほかにも統合失調症の兄弟がいて、親が亡くなった後、そこで寝ていると思って何日間もそこへずっと寝かしたまま一緒に暮らしていたりとかするような人たちが出てきたりとか、結構そういうお家がたくさんあるよね、親亡き後の障害がある人たちの生活というのかなり深刻になっているよねということで、それで先ほどのようなローラー作戦を始めるということを3年前からやりました。

1年目が年間3,600軒、2年目が4,500軒、今年はまだ5,000軒以上、回っています。そうすると、100軒ぐらい回ると数件、やはり問題が出てくる。5軒ぐらい問題が出てくる。夫婦2人と思っていたけれども、家族葬で1人になっているお家があったり、こちらのお家は80代のお母さんが、お金がないということで生活困窮ということで、みんなで一生懸命、すぐに支援に入ったら、よくよく聞いてみると、お金は通帳にあって、おろし方がわ

からなくなっている認知症の人だったりとかということで、家族が小さくなっているのに御本人がSOSを出せない人たちというのはいっぱい町の中で困り事を抱えていても見つけ出すことができないし、行政で幾ら立派な相談窓口を持っていても、そこまで届かない人がいっぱいいるということがわかり始めました。

その中にひきこもりの若者たちが随分いることもわかってきました。何かお困り事はないですかと言ったら、何も困っていませんと言いますが、男物の靴があって、こちらはお一人ですかと言ったら、息子と暮らしていますと言う。そうですかと帰った後、私たちのこういう相談に乗りますというところにひきこもりという名前を書いていると、しばらくして電話がかかってきて、実はうちの息子が働けないのだけれども、本当にこういう相談にも乗ってもらえるのでしょうかというようなことで生活困窮のところに相談が入ってくるようなことが出始めました。

この町には、豊中には、数年前の推計でいくと、実に2,800人。これは40歳以下のひきこもりの若者たちがいると言われていています。それが今回の調査でまたさらに豊中は5,000人以上がいるのではないかと、もう6,000人を超えるのではないかとというように考えると、相当多くの人たちが若者たちというか、ひきこもりの息子たち、娘たちと暮らしながら、どうしていいかわからないということになっているのではないかとということを感じ始めたということであります。

マンションも今、ひきこもっている人たちがたくさんいます。私たちの町は転勤族なのです。転勤族の町です。大阪市内まで10分のベッドタウンなのです。マンション群がたくさんあって、今は親亡き後のひきこもりの息子がマンションに1人で住んでいて、自動引き落としでどんどんお金が落ちていって、最後、お金がなくなって、さあどうしようというような状態の人たちが出てきたり、どうも生活できない、管理ができていないよということで管理組合から相談があって訪問してみると、親亡き後のひきこもりだったというようなことに会うことも随分出てき始めました。

こういう問題を地域から発見してコミュニティーソーシャルワーカーにつないで仕組みづくりをするということをやっているとずっとする中でわかってきたことが、この高齢期のひきこもりのパターンは2つあるのだということを考え始めました。経済的に裕福とまではいきませんが、経済的に普通に何とか暮らせる人たちの中には、親が大企業、企業にお勤めで、転勤がきっかけで不登校になり、ひきこもっていくという一つのパターン。それから、親の期待で受験に失敗して、そこから社会参加が難しくなっているパターン。就職までは何とか行ったが、その後、鬱、リストラ、介護離職等で社会参加できなくなっているというパターンの人たちです。

このパターンの人たちは、親の年金があるということで、かじれるすねがまだあるということで、かじれなくなるまで頑張りますので、発見が遅れます。それとあわせて、いろいろな課題を私がいる間は子供の面倒を見続けるしかないというようにどこから孤立している中で思い始めて、社会的孤立です。先ほどの御近所ともつき合いをしない、そして、

家族とも親戚ともつき合いをしなくなって、どんどん孤立状態に陥っているというパターンの人たちがこの一つです。

2群、2つ目のパターンは、経済的に困窮している場合というのは、親が困窮をしていて学校へ行くことに対しても余り積極的に子供に対しての働きかけをしないというようなことから、学習もうまく学ぶ機会も少なくなって、そのまま社会参加できないというような形で貧困の連鎖につながっていて、親元で何とか暮らす生活保護がつながっていくようなパターンで暮らしているというような人たちもいます。

こういう人たちをさまざま見てくる中で、どうして80代の親と50代の息子、娘というところまで8050という状況になったのかということのをいろいろ考えてきたときに、今の80代の年代の人たちというのは高度経済成長期の人たちです。高度経済成長というのは地方から都会に仕事をするために工場のある都会に集まり、仕事があるところに集まり、そこで終身雇用で頑張っていた時代ですから、真面目にけんかしないで頑張れば厚生年金がもらっていた時代です。学歴とかがそんなに問われなく頑張れた時代です。

ところが、50というのは、ある意味、今の平成の時代で就労期を迎えた人たちです。30年、振り返りますから、20ごろからの30年というように考えたときに、この平成という時代に非正規が非常に増えた。産業構造が随分変わりました。1次産業、2次産業というのは都会ではもうほとんどなくなってしまった。そして、海外へどんどん工場が行ってしまった。そうすると、単純労働のようなことでは就職できない。コミュニケーション能力がない人たちというのは地域の中でお仕事を選ぶということは非常に限られたお仕事になってきている。伝統工芸みたいなものも非常に弱くなっているという中で、彼らの仕事を選ぶということについて、なかなか難しい時代になってきている。

私の母は早く亡くなったのですが、今、生きてると80近い年代ですが、私が子供の頃に見た雑誌の12月号の付録に家計簿がついていたのです。その当時、私が子供の頃の家計簿には、食費、光熱費、交際費、ずっとあって、一番下の欄に親への仕送りという欄があった。これは今の80の人たちの生活パターンです。ところが、今もこの80の人たちはずっとあって、子供へ仕送りしている。これは今の経済の状況です。

1980年代以降、幸福度というのは上がっていないのが日本の現状らしいので、そう考えると、この平成の30年というのはなかなか幸せを感じることもできない、お金が豊かな気持ちにもならなかったと考えると、8050問題というのは経済構造によって生まれた平成の遺産だということで、一昨年、平成のワードということで朝日新聞でも取り上げていただきましたが、そういう意味では、8020という言葉は皆さん、よく御存じだと思います。80代で20本の歯なのですけれども、それにひっかけて、やはりこういう問題、象徴的にみんなに理解してもらおうということで、8050と言ったらみんながぼかんとするので、80代の親と50代の働いていない息子、娘ですと言ったら、いるいる、近所にたくさんいるねという話になってきて、これは特別な人だとか、その人たちがサボったというよりは、今の時代の言葉なのだということで御理解をいただくようにお話をしています。

先ほどの裕福のパターンというので大企業に勤めていて、転勤があって、子供が転勤によりいじめに遭う、受験に失敗、家庭内暴力、ひきこもり、こういうパターンの人たちというのは一定数あります。こういう方々、どこで出会うかという、家族が相談に来るといのはなかなか難しいので、一つはマンションからの騒音がうるさい。隣の家がうるさいということで相談が入ってきて、よくよく聞くとこういう話だったとか、お母さんが息子のことを思い悩んで御相談があるというような場合は、我々は、親を何とかエンパワーメントしないと、親が相談に来ないと本人から相談に来るといことはなかなか難しいわけですから、親が壁にならないように、親に参加してもらうためにということで家族会をつくっています。

今は全国ひきこもり家族会連合会というのもできていますし、それぞれの支部も広がっていますけれども、私たちの町でも、これは10年前に家族会を立ち上げたことで、そこで親御さんたちが話している姿を見たときに、ひきこもりの若者たちということで、まずは50人ぐらい集まる会をやったところ、来ている人たちの相当数が、息子が50以上だという80代の人たちの1群がいたというところで、ひきこもり問題というのはそんな小学校、中学校、不登校みたいなレベルの話では全然ないなということに気づき始めた。

その80ぐらいになられている方々は、もう自分が新たなことを挑戦することがもう苦しいので、なかなか新しいことにチャレンジしたりとか相談窓口に行ったりとか、子供の問題を解決していこうという、そのエネルギーがかなり弱まってしているということがあるので、60歳ぐらいまでのお母さんはまだ動きますが、そこから後の人たちがなかなか動けないということもわかってきました。

長らくのひきこもりの状況が続きますと強迫性障害等の二次障害が起きて、家の中で統合失調症を併発したり、家族を支配し始める。力関係で親子が逆転していくという現象を見るようになりました。強迫性障害でトイレやお風呂に入る時間がかかるからということで、もうそこを占領してしまって、なかなか家族と一緒に暮らすということが難しかったりとか、お金を出せということで、出さなかったら暴力を振るうみたいなことの中で、親が子供たちも支配下に置かれるということで、家庭内暴力として登場してくるというのが一つのグループとしてあらわれます。

もう自分が辛抱するしかないというように親御さんたちは思って、精神的にも追い込まれていって、ずたずたになっているという状況です。こういう場合をどうするかということで幾つかありますが、入院させるための民間業者というのが現れて、60万円で引き受けます。4人、若い頑丈なマッチョな人たちを連れていって、本人を羽交い絞めして病院に連れていくというようなことを請け負うような民間業者が出てきたりとか、必要悪として、いろいろな問題がこういう生活がどこにも頼れない人たちのところにつけ込んでいっているという問題もあります。

私の町にもこういうお話がありまして、こういうものにお金をかけるなということで、我々が説得して本人と話をして、今はこの子はちゃんと就労はできるようになっています

が、こういうアウトリーチしてくれるところがありません。

強迫性障害なのがはっきりわかっている場合は保健所なども対応はしますが、本人が拒否してしまうとなかなかそれ以上、訪問してくれないということで、家族さんも本当に手の打ちようがないということで困り果てているというかなり精神的に追い込まれるパターンの人たちです。

昨年の6月、これは大阪北部地震、豊中でも大きな被害がありましたが、ブルーシートのボランティアの依頼がありまして、家庭訪問したら、そこで出てきたのが介護離職で10年間ひきこもっていた若者でした。親が亡くなった後、1人でもう生活費がなくなるというところでぎりぎりのところで私たちは出会いましたが、彼はもう今、就労はできています。もともと就職した経験があって、一時的に介護離職をして、そして、その後、就労ができないままずっといて、親が亡くなったという人なので、こういうように1回でも就職した経験がある人たちというのは生活困窮者支援の中の就労支援で比較的仕事には結びつきやすいということがありますが、先ほどのようずっと働いたことが一度もないという人たちになると、働くということと、もっと言いますと自己肯定感が全くないので、社会的に自分の役割というのを見出しにくいということがあります。

私がこの仕事をし始めた中で一番最初に出会った人が30年のひきこもりの親御さんでした。80代のお父さんが息子の家庭内暴力のことで電話をかけてきた。よくよく聞いてみると、小中学校は不登校ぎみだったが、高校は単位制、3日間で中退。そこからどこにも相談することはできなくて30年ひきこもっているというお話でありました。親が高齢になって、畳2ミリぐらいのへりのところで足が上がらないので転倒して、どうしたらいいのかということで思い悩んで、そこでやっとギブアップしてきたという話であります。

私にコップを見せて、自分たちはこのコップの中に水がいっぱいたまっているような状態なのです。動かすとこぼれるでしょう。もう変化をさせることが怖いのです。変化をさせるというのは、結局、仕事に行けとかいろいろなことを言うと本人が怒り出すので、もう何もしない。昨日のままの今日というのをずっと変わらないということをして大事にしながら暮らし続けていて、5年たって、10年たって、20年たって、30年たった。衝撃的でありました。

この親子は、今、寝たきりのお母さんとお父さんがいたのですけれども、それと息子さんでしたが、親子分離をさせて生活を分けて、息子さんは今、生活保護を受けながらですけれども、就労支援を受けながら生活を始めました。随分生活が苦しかった、もう本当に追い詰められていたところから、自分なりの生活を少しできるようになっています。

親亡き後のひきこもりのところでいいますと、今、働けるようになっていますが、彼は大学を卒業して社会に出られなかった。発達障害やパニック障害などの障害があって、一応、学校の勉強は何とかできたけれども、就職というところでつまづき始めて、何年間も家から出られなかったのですが、お母さんが我々の相談窓口のチラシをどこかから手に入れておられて、冷蔵庫のところに貼っておられたそうです。そして、息子にここに行けと

いうことを案じて亡くなりました。そのチラシを持って、彼は3カ月ぐらい相談に来るまで時間がかかりましたが、そこでやっと動けたと言っています。もうぎりぎりまで追い込まれるまで自分が動こうという気持ちにはなれなかったということと、親もそのことを息子に指示することができなかったということでもあります。生活困窮者支援でこういう人たちを支えることが今、相当できるようになっています。

でも、彼らの中には、ひょっとするといろいろな特技があって、産業がもっと違う、働き方がもっと変わっていれば十分働けるのではないかと思う人たちがいます。これはつい最近できた本なのですが、漫画が描ける子によって、漫画の本を私たちは4冊出しました。この漫画がテレビドラマのきっかけになった漫画なのですが、そして、詩を書く子、音楽ができる子、手づくり品がとてできる子、いわばこつこつこだわりのものができるという子たちもひきこもりの若者たちというか、年代の中に相当いるなということがわかってきました。

「びーのびーの」という場所をつくっているのですけれども、ここは彼らが自己肯定感を高めるための居場所としてつくったところです。詩を書いてくれたたかや君、こういう詩を書きます。

みんながぼくらにいつてくる
「ふつう」になれといつてくる
ぼくらは「ふつう」になれないのに
ふつうというギブスのせいで
ぼくらはいっぱい傷ついて
ひとりぼっちでないてきた
「かわれ」「かわれ」とみんながさ
ぼくらにいつてくるけどさ
ほんとにかわらなきゃいけないのは
ほんとにぼくらなの？
ぼくらは「ふつう」にとどかないのに

みたいな、こんな詩を書いています。

私たちは今、家庭訪問するときに支援をするという形では行ってない。ほとんどスカウトして歩いています。詩が書ける、よし詩集を出しましょう。なぞなぞしかできない、よし、なぞなぞが100個かけたらなぞなぞの本を出しましょうということで、彼らのできることをこんなことしかできないのではなくて、そんなことができるのかということで引き出していくというようなことをする中で、この本は当事者がどうやってひきこもりから抜け出したかを本人の言葉で書いてもらっています。そして、どうして就職できるようになったかも書いてもらっていますが、多くの人たちがやはり小学校、中学校のときのいじめというのもトラウマになっていることもわかりました。

彼らのこういう思い、社会的に居場所をつくることで、もう一回、自分たちが認められ

るという場所をつくろうということで始めたのがびーのびーのという場所です。これを見てください。

(ビデオ上映)

勝部氏 これは5年前ぐらいなので17名ですが、もう今は60人ぐらいが社会に出ていています。居場所まで出てきてくれている子たちはもっとたくさんいるわけですが、生活困窮者自立支援法という制度が、これまでコミュニティーソーシャルワーカーというのは大阪独自の取組でしたので、私たちはそこで彼らを支えてきたのですけれども、生活困窮者支援というのができたことで、就労支援であったりとか本人たちの支援プランを立てて、一緒に本人たちに寄り添いながら就労や居場所やそれぞれの出口づくりをしていくということを始めの中で、やはり何か一気に仕事に出られないよねという人たちが相当いるということがわかったわけです。

就職に近い人たち、今まで就職したことがある人たちはもう一回就活をして、就職するイメージがあるのですけれども、ずっと自分というのが世の中で必要とされていないと思っている人たちにすぐに仕事と言っても、彼らはそういうようなイメージにはたどり着けない。

ちょうどこの漫画を描いてくれた彼女は、仕事をしていたとき、人間関係でつまずいて悩んで、人が信じられなくなり、外に出るのが嫌になりました。勝部さんと母が話をして、絵が描けるということで、びーのにつながったけれども、今、思えば、そのつながりがよかったのだと思う。他人に関わられるのが嫌だったから、支援者が来ると言われたときにとても嫌な思いになっていたがという話なのです。

他人に関わられるのが嫌だったけれども、今はもう毎日来ているのですが、やはりびーのに行ったのが大きかった。びーのの中で人を信じられるようになった。そのままでもいい、嫌なら嫌、好きなことをやっていいというように受け止められた。最初はうれしかったです。人との関わりを受け入れるようになった中で、自分が人から好かれていたのがわかってきて、それがわかると自分も返そうと思うようになりました。私も好きということ伝えたくなった。役に立ちたいと思うようになりました。一人一人に対して役に立ちたいという思いから、このびーのの中で役立ちたいというようになって、今はお仕事に就けるようになったということを言っています。

やはり世の中からずっと排除され続けているということが続いていくうちに、社会との関係を自分が切ることによって、もうその変な期待を持たないでおこうとか、そのかわり、こちらも期待しないし、人からも期待されないという関係のスパイラルに落ちている人たちに、自分も人の役に立ちたい、人からも愛されるというようなのを考えたときに、どこかもう一カ所、一般就労の手前のところで、そういう自己肯定感を高めるような場所が必要だなということで、我々の町では、中間的就労という場所をつくって、それで2時間500円のお金を渡すという。普通は参加費を払うのですけれども、そうではなくてお金を払うということの場所を独自でつくっています。

これは例えば若者サポートステーションというところだと39歳になったら出ていかなければいけないとか、障害者の就労のB型とかA型というところになると、手帳をとらないと参加できないというようになると、彼らのように自己肯定感がすごく下がってプライドが傷ついている人たちに、あなたはまず障害者ですよというところから入り込むのはとても難しい。そして、年齢が39歳で来年になると、また別のそこから出ていかなければいけないですよというような追い打ちをかけられるような状況の中で、次のサポートをしていくというのは非常に難しいということがあるので、何とか制度ではない形で彼らの居場所と役割が発揮できる場所をつくらうとして考えたのが先ほどのびーのびーのという取組でありました。

一定数、ここで自己肯定感が高まって、人から大事にされると思うようになると、今度は人の役に立ちたいということで就労体験や就労準備の方に結びついていって、一般就労の方に行ける子もいます。もちろん、なかなかほかの原因が基本にあって、発達障害等いろいろな問題があって、こだわりがきつくてなかなか社会に出ていくのが難しい子もいますが、それでも先ほどの詩を書いている人は毎月1つの詩を私のところにメールで送るという社会参加をしています。社会の参加の方法というのはいろいろな方法があるのではないかなというようには思っています。

現在は、こうやって社会参加できるようになった人たちが、今、豊中の町の困り事を解決する役割をしています。小売商店の人たちは人員不足でほとんどの会社が求人しても人がいません。その就労でお手伝いをさせていただいたり、15分200円でちょっとした生活支援を支える役割で高齢者を支えています。大型ごみを捨てたりするのは若い人でないといけないので、彼らはこうやって人のお家に行くことでみんなに感謝されて、自分は世の中の役に立てるということを実感することから就労支援に結びつくこともございます。

さらには、びーの×マルシェということで、これは買い物困難地域に空き店舗を使って、そこでお店をやっていますが、ここのお店の店員は全員ひきこもり経験者です。彼らが優しく接客をします。ここにはどうも買い物に来ているわけではないだろうなという親子が来ます。その息子はひきこもっているだろうなという子が来ます。コーヒーを飲んで、そのうちに自分の撮った写真をここに掲示していいかと言って持ってきます。もうギャラリーをつくりました。鉄道をいっぱい撮っている子たちが、鉄っちゃんのコーナーがあったりとか、詩集をつくっている子がいて、まだこういういろいろな場所には出てこれないのですけれども、家でやっているものをここに持ってくるという社会参加をし始めている子たちもいます。

こうやって地域の困り事を彼らが解決することによって、今、私たちの町では、このひきこもりの若者たちが非常に地域の戦力になっています。1人で例えば家庭訪問、お家に行って仕事をするのは難しくてもバディーがいれば頑張って働けたり、一日8時間の仕事は難しくても3時間ぐらいの仕事であれば十分できたりというような人たちもいますので、働き方を少し調整することで、今、町の中のいろいろな困り事を解決するという、い

わゆるコミュニティービジネスに近いことも彼らの取組の中でできるのではないかという挑戦を生活困窮者自立支援という枠組みを使って、一生懸命やっています。これは全国にこういう窓口があるわけですから広げていく可能性はあるのではないかなというように思っているところです。

いろいろ考えた中で、今までお話ししたように、さまざまな人たちと出会う中で、やはりひきこもり対策というのがこれまで39歳までとなっていたことで、そこを飛び抜けてしまったら、もう彼らは一体世の中の何対策で出会うのでしょうかという制度の本当に狭間に陥ってしまっていて、もっと言うと、病気かどうかということも発達障害なども今は40歳以上ぐらいの人たちはほとんど診断も昔、受けたことがない、ちょっと育てにくい子だったみたいな感じで来ていますので、親御さんも気がつかないままにずっと来ている人たちも相当います。親の会ではそういう勉強会をすることで、そういうことだったのかと納得できて、親はほっとしているという面はありますが、かといって、では、何ができるのかというのがなかなか難しいということもあります。

ひきこもりというのは状態ですので、背景や原因はさまざまありますが、基本的には長らく社会から必要とされないという時期があるために、自尊感情が非常に失われていっています。戻していくためにはつながりとか居場所みたいなものがないと、いきなりというわけにはいかないということです。これを何らかの形で、そういう場づくりをそれぞれの自治体でしっかりとつくっていけないか。

これも多様につくったほうがいいかなというように思いますが、介護離職。これは介護者の会議体なので、男性介護者の交流みたいな形で、入り口はそちらから入ったほうが、ひきこもりというので入らないほうがいい場合もあるでしょうし、リストラとかメンタルとかという人たちについても、ひきこもりは現象なので、違う入り口から同じような悩みを持っている人たちを集めるという当事者会みたいなものをつくっていくということも重要かもしれません。

先ほどお話ししたように、障害の有無や年齢不問の居場所で、活動費が出ればさらによいということで、活動費は公的保障がないのです。公的に何か渡せるお金はないので、我々はこういうものを一生懸命売っています。売ったもので、販売した費用を彼らの活動費に充てるということを生懸命やらせていただいているということですが、こういう体制も民間のところでもっともっと広がっていけばいいなというようにも思っているところでもあります。

ひきこもりだけを特化して支援していくというひきこもり支援員的にやっていくというのも、もちろんスキルも要りますので、いろいろな考え方はあるかもしれませんが、出したその先に何かあるのかということもありますので、生活困窮者支援などとリンクさせていくようなことがいいのではないかなというのは私の中ではあります。ひきこもりの支援事業みたいな形になっていくと、またそれが単独制度になって新たなまた狭間ができていくというようなことも考えられますので、何らかの横串とつながる必要があるかなとも

思います。

相談方法の検討が必要かなと思っています。私たちは今回、本人たちに支援者が一生懸命支援できますということをネットやいろいろなところで紹介しても、彼らは用心深いので簡単にはアクセスしてきません。メディアで我々が取り上げられたりとかそういうものを見ると、匿名でメールがやってきて、全国から相談が来る。親御さんも匿名で相談をしてくる。そして、なかなか信じられるか信じられないかというのをお試ししながら関わってくるというのがよくありますが、匿名性の高い相談を考えるのであれば、例えば当事者たちの相談窓口のようなものはネットなどをうまく使ってできないかとか、そうやってひきこもりから脱却できた人たちから当事者の声みたいなものをアップして、自分に近い人たちがどうやって、どういうストーリーで本当に社会に参加できるようになったのかみたいなことを示していくようなことができれば少しは変わるかななどということも思っています。

より近いところの相談がいいのは間違いないです。自分でお金をかけて例えば相談窓口に行けない人たちがたくさんいるからです。私、中山間地のひきこもりの本人から連絡があって、相談窓口まで行くのに電車やバスがない。相談窓口まで行くためには親に乗せていってもらうしかない。親には知られたくないのに、親に乗せていってもらうしか方法がないのが自分はとても苦しいというように言っていた人がいます。

そう考えると、やはり近くにないといけない。生活困窮者支援は福祉事務所のないエリアに関しては都道府県が対応していましたので、例えば兵庫県で中山間地だった場合に神戸まで行けとか、そのような話になると、とてもではないけれども、御自身で行くということは難しいわけでありますので、やはり身近なところに相談窓口をつくることの意味と、ひきこもり問題は近所の人に知られたくないということで、役場に知り合いがいるから行きたくないという、これもたくさん相談としてはあります。なので、より広域に、より身近にという両方のパターンで匿名性の高い相談窓口を入り口にしながら、相談できて信頼できるところにつながっていくような両パターンが必要かなというようにも思うところがあります。

予防の問題でいいますと、やはり多くの人たちの中に不登校とか高校中退の問題があるということもわかり始めてきています。そこからやはり30年近く外に出られなかったという人たちはいろいろな課題を抱えて二次障害が出てきますので、教育との連携が非常に重要で、全件把握できるのは教育の場面です。いわゆる小学校、中学校というのは全員がそこに在籍するわけですから、その子たちのその後がどうなっていくかについて送り出して終わりではないよということを今、私は教育委員会の研修によく呼ばれるようになってまして、先生たちにこういうひきこもりの若者たちの現状があるということをお話しすると、先生たちはみんな思い当たる節があるので、講演が終わった後、行列ができます。自分のあの年代のこの子がこうなっていると、こういうようにできなかったとかということについて悔やんでいる人たちがいっぱいいるわけです。

ただ、1年たったら4月になるとまた次の学年が始まるので、先生たちはまたそこから切りかえて違う展開になるのですけれども、少なくともスクールソーシャルワーカーであったりとか次の学年になる前に、何か課題がある人たちを福祉のところやこういう就労支援みたいなどころとどう結びつけていくかみたいなどころについては、教育の枠組みだけではない関わりをぜひ早急に構築していく必要があるのではないかな。これは予防的なところで重要ではないかなというように思っている内容です。

8050問題は社会的課題だという啓発を先ほど言いました。平成の遺産ですというような言い方もしましたが、平成という時代にこういう社会構造が大きく変わった中で出てきた一つの社会的な問題ですということで、親が自分の息子を仕方がないというように思っただけでなく、そのことによって孤立させないという啓発をぜひメディアも含めてしっかりやっていただきたい。8050が8020ぐらいに当たり前になったら相談しやすくなるのではないかなという気持ちがあります。

全国に相談場所が必要です。やはり権利として社会参加を保障していくということが重要だというように思っています。生活困窮者自立支援法は社会的孤立を解消するということは、裏返しますと権利として社会参加ができることを保障していくのだというように思っています。

そのためには、生活困窮者自立支援事業をうまく活用すること。しかしながら、最近、私、国の研修でいろいろとお尋ねして皆さんにアウトリーチしていますかと聞くと、アウトリーチ、いわゆる家庭訪問までして、いろいろな御相談に乗れているところというのはまだまだ少なく、3分の1ぐらいしかないと思われま。それはやはり人員的な体制の問題もありますし、スキルの問題ももちろんあるとは思いますが。これほど8050的な問題が社会的課題だと、ひきこもりの中高年の問題が出てきているということであれば、そこだけを一人の単独の相談員というよりは、生活困窮者自立支援の中にアウトリーチできるような職員を配置していただく、あるいは連携できるような体制をとっていただいで、うまくこういう問題をしっかりと見えるようにしていただけたらどうかなというように思っています。

そのためには、ソーシャルワーカーというのが、今、社会福祉士がこういう役割を担う場合も多いのですけれども、専門課程の中で、こういうアウトリーチの問題であるとかトータルで生活を見ていくような問題、生活困窮者の問題等、しっかりと伝えられるような専門職養成というのも今後重要ではないかなと思っております。

以上、いろいろなお話をさせていただきましたが、私の町で今、起こっている現状ということでお話をさせていただきました。ありがとうございます。

質 疑 応 答

司会 ありがとうございます。

それでは、まだ少し時間がありますので、御質問を受けさせていただいてよろしいでしょうか。この機会に、もし先生に聞いておきたいということがあれば何点かお受けしたいと思います。お願いします。

質問者 品川区でも、今、ひきこもりの支援ということで非常に取り組んでいるところではあるのですが、来年から社会福祉協議会と協力して40代以上の中高年の方の支援もしていこうというようになっているわけなのですが、アウトリーチの件でお聞きしたくて、何とかアウトリーチをしていきたいといったときに、アウトリーチをする人なのですが、やはり必ず専門的なスキルがないとまずいものなのでしょうか。例えば社会福祉士の資格とか、精神保健の何か資格とか、そういったものがないとまずいのかとか、そのところだけお聞きしたいです。よろしくをお願いします。

勝部氏 家庭訪問をしたらいいかと言われると、家庭訪問をしても先ほどの話ではないですが、来られたらうざいと思われるわけですから、基本的には行って、自分が本人の困り感から関わるということをすごく私たちは意識してやっているのです。ひきこもっていること自体を本人はそんなに困っていなかったり、生活にそんなに困りがない可能性があるのですが、例えば歯が痛いが行けなとか、髪の毛、散髪に行くのに嫌だとかという人たちがいると、散髪ボランティアさんと私たちは一緒に行ったりとか、歯医者さんをお願いして、歯科医、ドクターをお願いして、人と会わないように歯医者者に連れていくという約束をしたりとか、いわゆるちゃんとこの人は自分の困っていることを助けてくれる人なのだとわかると、その後の信頼関係というのが結べるのですが、あなた、就職しなさいとか、そのようなことを言いに行ったところで、面倒くさい人がやってきたという感じなのだろうなと思うのです。

だから、むしろ先ほど言ったように、そういう人たちをどうやって支えるかといったときに、「支援員です、私はあなたを支援します」などと言われると、何を支援してくれるのだという感じなので、本人のできること、ストレングスです。強みをちゃんと見つけて、その人が社会でその人のためにできる場所をどうやって見つけ出すかぐらいの役割を果たすような形でないと、きっと来られた人は非常に不愉快な思いをするということで余計に傷つけたりということがあるかもしれないということで、多分、そういうような話だと思うのですが、このあたりのソーシャルワーク、本当は、ソーシャルワークは本人の社会との関係性を再構築していくというのがソーシャルワークの仕事なので、考えていくと当たり前のことなのだが、今までのソーシャルワーク養成は制度に当てはめるとか制度論を勉強しているので、そういう制度にいない人たちをどうやって地域の中で居場所と役割をつくるかみたいなことは余りまだ勉強できていないと思うのです。

だから、カリキュラムもぜひそういうように改革してもらわないと、時代でこういう

人たちを支えようとしていることに対しての専門職養成がまだ十分整っていないという感じはするのですが、例えば就労支援とか生活困窮でも家計支援とかというように、それに特化して勉強して、やり方みたいなことを学んでいるようにアウトリーチのところもしっかり学ぶような形にして一つの仕組みにしていくというのはあるかなというように思いますので、ただ行って、話を聞いて、うーんと次、何の手だてもないのですよというのも現実の問題としては今、あちこちの困窮者の相談窓口ではある話なので、その後の出口づくりをしっかりとあわせて考えていくようにはしていく必要があるかなとは思っています。

質問者 ありがとうございます。

司会 どうぞ。

質問者 CSWさんというのが豊中の社会福祉協議会さんでいらっしゃるということなのですが、先ほどの質問とも似ているのですが、このコミュニティーソーシャルワーカーさん自体に資格要件があるのかということをお伺いしたいのです。

勝部氏 基本、うちは社会福祉士がやっています。ただ、先ほど言ったように社会福祉士の養成課程自体がこういうことまで今、まだ十分できていないというのはあるのですが、どこかで業務独占みたいにちゃんとやっていかないと専門職として誰でもやれるという話でもきつくないのかもしれないです。やはりセンスのいい人はいるというのは間違いないのですが、センスがいいからやっているという話でいくと、センスの悪いドクターもいるかもしれないとか、わからないですが、そういう職能でしっかり勉強していくという体制をやっていかないと、この国のソーシャルワーカーというのは伸びないし、仕事自体が誰でもできるようなお話になってくると、きっと専門職としての位置づけも弱いままなのではないかなという気はするのです。そこはどういう人ができるかという話。

基本的に言うと、徹底的に本人尊重ができるということです。自分がしたことがない生活をしているから、粘り強く30年引きこもったということについて、すごいなとそのこと自身をちゃんと受け止められるかどうかというところがあって、全否定していて、変われ変われと先ほどのたかや君の詩ではないのですが、あなたが変わるべきでしょう、あなたが社会に適應しなかったのでしょう、あなた自身の問題でしょうという決めつけで本人のところに行き訪問すれば、それはきっと余計なことを言いに来る人は家に要らないと思われるのだらうと思うので、その当事者などしっかりと向き合って学ぶということはしていく必要があるのです。家族会とか本人会とかもしっかりと学び合うような機会を持っておかないと、自分の先入観と思い込みで家庭訪問とかしていくと二次的にまた傷つけてしまう可能性があって、もう次、なかなか新たな人を受け入れてくれない可能性はあるかなと思うので、やはりそれなりの学習というのは必要だらうなとは思っています。

司会 ほかにありますか。

では、どうぞ。

質問者 我々のほうでも実は社会的孤立を抱えている方々に対して、社会参加のきっかけをつくってあげることが重要であると考えておまして、今日のローラー作戦とか教

育等の連携の課題であるといったことが非常にこちらでも重要視しているところではあるのですが、例えばなのですが、社会教育の場でそういう社会参加のきっかけづくりをしてあげたいなというようなところはあるのですが、社会福祉の立場からそういう教育関係、社会教育の取組と連携とか、どのような形で進めているか。そういうようなときの課題、うまくいかない場合の課題というのを豊中市の事例について、もう少し詳しく教えていただければと思います。

勝部氏 私たちが先ほどの居場所を例えば絵を描ける子が絵の描くところに行くとか、社会教育でもいろいろなプログラムはあると思うのです。いろいろな社会参加の場というのはあると思うのですが、やはりお金になったほうがいいかなと思ったのです。

プチバイトみたいな言い方をしていたのですが、どうして出てこられたかというのをいろいろ出てきた人たちが自分で作文を書いたのをここに載せているのですが、家にいるよりも外に行ったほうが自分にメリットがあると思わないと出て行かないというのがあって、単純な話です。自分は外に行ったことによってお小遣いがちょっとでも手に入るのだったら、そのお小遣いを手にして、もっと見たい映画が見られるとか、乗りたい電車に乗れるとか、何かできるという経済的自立の一助になるということ、親からお金をせびらなくても自分で何かを買えるというようなことを小さくてもやっていったほうがいいのではないかなというように思ったので、ここで始めたわけです。

でも、社会教育で実際に我々がやっているそういう場所で、例えば手作りのいろいろなものを作ったりするときは、指導に来てくれている人たちは社会教育でいろいろと活動されているような人たちがボランティアで関わってくださったりということはもちろんあるわけですが、作り方としては、先ほどの段階的なところで少しでも社会でお金を稼ぐ練習みたいなことができたらいいなというのがあって、これは制度的にやろうと思うとなかなか居場所には参加費を払って来なさいとかというようになってくると、金まで払って別にそこまで行くのだったら、もう家にいたほうが楽だという感じになってしまうところがあるので、その辺のインセンティブをどうしようにつくるかということはいろいろ考えながら、うちの町では実験的に今、やっているということなのです。

社会教育が絶対的に何かできないということはないと思うのですが、もう少し自己肯定感がしっかりと高まらないと、いきなり例えばみんなの集まっている講座に行くとかというようなことにはならないです。結構教育で傷ついた人が多いので、教育ということについての学校みたいなところについては、ハードルが高かったりとか、不信感を持っていたりということもあるので、少し小さい集団でいろいろと慣れながら、次のまたステップでさせていただいているかなと思います。

ただ、これはそうやってやりながらだったのですが、意外なことがありました。実は全然違うのですが、野球をやったのです。彼らで野球のチームをつくったのです。それは申し訳ないのですが、実は高次脳機能障害の人たちの中に昔、野球をやっていた人がいて、その人をグラウンドに立たせたいという願いでグループをつくったのですが、

対戦相手がいなかったのです。対戦相手が誰かいないかなと思ったら、ちょうどひきこもりの若者たちがいっぱいいたので、彼らに野球を一緒にやろうということで野球をやったのですけれども、ほとんどスポーツ経験がなかったりとかしているのも、しかも野球のグループの中からはじかれたりとか、そういうスポーツの苦手な子も多かったのでもううまくできないというように思っていたのですが、グループを組んで対戦してみると、チームワークがだんだんできたということで、人と力を合わせるということがそういうことによってうまくできたりということもありました。

だから、プログラムとしてはもう社会教育のいろいろなものというのをもちろん使っているのですけれども、基本的に競争しない、一人一人を認めるということをベースにしてやっていく中で、だんだんみんなが肯定していくようになったかなというように思います。

司会 ほかにございますか。

質問者 今日は講義をありがとうございました。

親の方から非常に相談が多いのですが、親の方にエネルギーをつけてもらうという発表がございましたが、そういう方法論というか、親の方にどのように関わっていけば本人のひきこもりの方にもいい影響が出るような関わり方というのがあれば、教えていただければありがたいなと思うのです。

勝部氏 やはり親同士で話してもらうというのはすごく力になると思っています。やはり自分の育て方が間違っていたのではないかとというようにすごく自分を責めている親御さんが多いとか、それから、いろいろな人たちからたくさん傷つけられているのです。あなたが甘やかしているからそんな子になったのだというようにいっぱい言われているので、親御さんも非常に傷ついているということもあるし、相談したい御主人は全く相談に乗ってくれない。子育てはお前に任せていたのにこんなことになってみたいなことになってどんどん追い込まれているということがあるので、実は同じような人たちがたくさんいて、8050が先ほど言ったように結構いっぱいいるのだとわかってくると、余りそんな自分だけを責めることもないのだなというように思えるからというのが一つです。

それから、思い切って相談窓口で相談した人が、子供さんたちが自立をし始めたというような経験者の話を聞いてもらうと、そういうやり方があるのかということがわかったり、就職だけでない自立の仕方もあるよというようなこととかも人から聞くとなるほどなというようにわかって、自分の子供のパターンだったらどのようなやり方があるのかといういろいろな考え方とか道筋が見えてくると思いますので、やはり親御さんを孤立させないということが重要だと思うのです。

そうすると、マンツーマンの相談ももちろん大事なわけけれども、学習もありますね。例えばひきこもりの全国の親の会みたいの人たちに少し講演してもらうような場面で、いろいろなお母さんたちを集めて、息子が実は何だかおかしいなと思って、うまく育てられないなと思っていたが、うちの子のこだわりはこういうことだったのかということが理解

できると、そういうことで私は親子でけんかばかりしていたが、そうではなかったのだなと理解できなかつた自分が理解できて、なるほどとわかるようなこともあると思いますので、親を孤立させないというためには親御さんの会をつくったり、あるいは学習する場をつくったりとか、親同士をつなげるということをぜひやっていただくのが大事ではないかなと思います。

司会 ほかにございますでしょうか。

閉 会

司会 ありがとうございます。改めて講師の勝部先生に拍手をお願いします。

それでは、以上で「青少年問題調査研究会」を終了いたします。

ここで連絡がございます。皆様のお手元にアンケート用紙をお配りしておりますので、御記載いただきましてお帰りの際に受付のほうに御提出いただければと思います。

それでは、お忘れ物のないようにお帰りください。また、本日は非常に希望者が多くて席のほうが大変狭い状況の中でお入りいただきました。本当にありがとうございました。